

農業排水モニタリング調査

岡村貴司・幡野真隆

◆背景・目的

琵琶湖には春先に農業排水が流入し、漁場の一次生産力の低下や底質環境の悪化、魚類への影響が懸念される。そこで、懸濁物質(SS)、農薬、栄養塩など一連の汚濁・汚染負荷について調査してきた。

本研究ではモニタリング調査等を継続的に実施し、琵琶湖への負荷の状況や環境の動向を把握することを目的とする。

◆成果の内容・特徴

○農業排水モニタリング調査*

- ・水田排水路および承水溝口(ともに近江八幡市)において、SSは4月下旬から5月中旬に多くなり、農薬成分の合計値は5月下旬から6月上旬にかけて高くなった(図1)。

○琵琶湖内への農業排水拡散調査

- ・離岸約500mの沖合でもアユ稚魚が濁水忌避を引き起こすとされるSS濃度の22mg/lを超えるSSが検出された(図2)。

○宇曾川濁水流出状況調査

- ・4月12日から5月20日の期間中、透視度30cm以下の日は16日間であった。

◆成果の活用・留意点

- ・排水の流入は毎年みられるため、今後も継続してモニタリング調査を行うとともに一次生産力や底質環境を把握する必要がある。

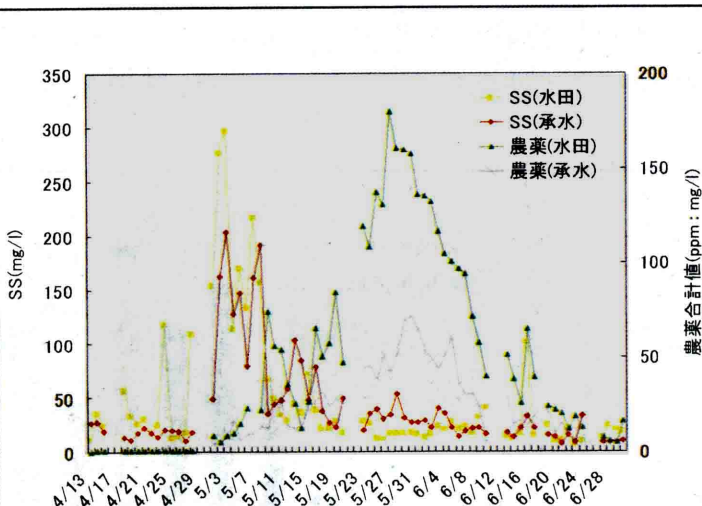


図1 水田排水路および承水溝口におけるSSと農薬成分合計値の日間変動

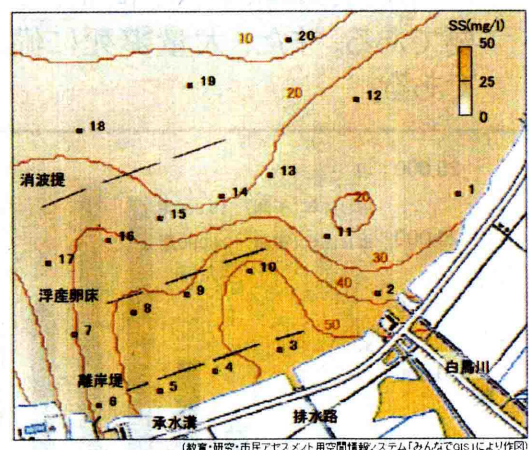


図2 近江八幡市牧町地先におけるSS拡散状況(5/9)

*: 農薬分析は、滋賀県立大学 講師 須藤幹氏